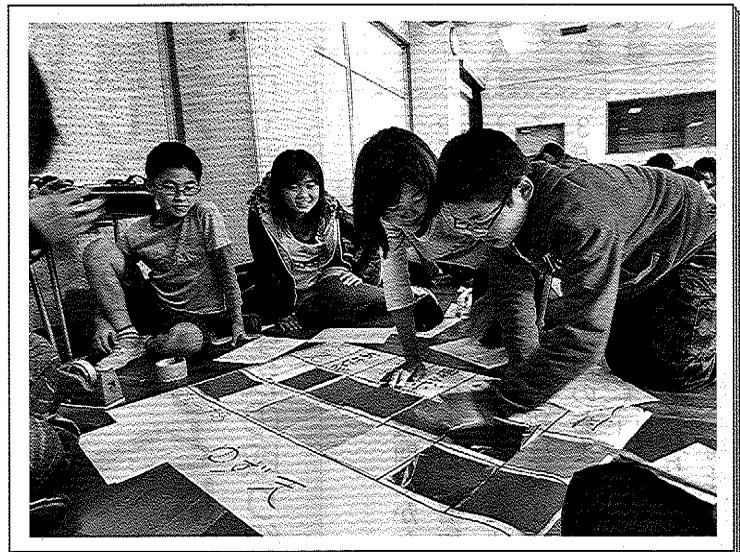


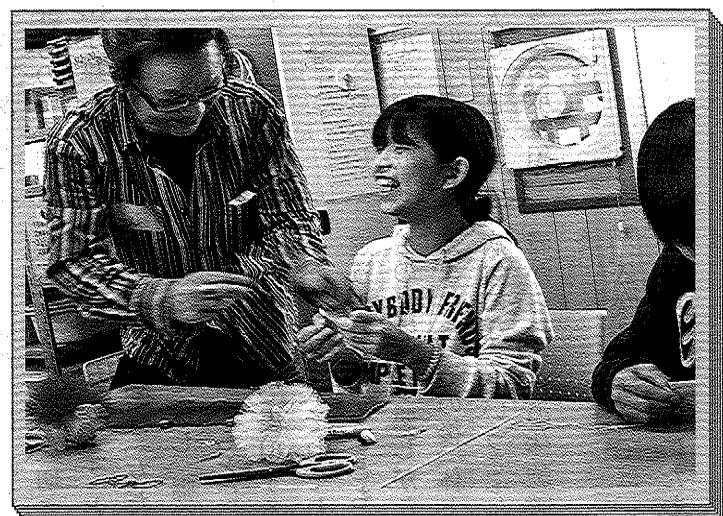
まいにち学校
まいにち街の中
こじもの笑顔に
つなげる

はじける こころ

vol.33



心の色のワークショップ
「この時のわたしの心の色は…」



もみじの家でたわしづくり体験
「たわしづくりって難しい」

げんげのとは：れんげ草が生い茂った草原のこと。れんげ草は、茎が地に臥して広がり、春になると蓮の花に似た小花を咲かせます。また、れんげ草は緑肥として大地を肥やします。蓮に似た小さなれんげ草を、子どもたち一人ひとりの尊厳に見立てて、それが一面に花開く様子をイメージしました

特集1 ~精神障害者との出会いを通して~

「生きづらさ」感じる人を支えるつながりとは 箕面市立萱野北小学校の取り組み
(座談会)~災害を「自分事」にする防災教育をめざして~

山口純さん(箕面市立萱野北小学校) 岸本優子さん(箕面市立南小学校)
佐藤秀昭さん 田中智佳子さん 宮本泰治さん(箕面市立萱野小学校)

連載 司書さんのおすすめ本 『おこだでませんように』

田中瑞穂さん(箕面市立箕面小学校)

・わたしの人権教育 豊川南小学校 岡村公子さん

・知ってる?市民のちから

はたらく・まなぶ・あそぶをつなぐ!? 子ども通貨 まーぶ

・考えてみよう「どうなるんだろう…?」 かわのひでたださん

・聴かせてよ「子どもの気持ち」～震災について～

… 1 P

… 3 P

… 2 P

… 4 P

… 5 P

… 6 P

… 7 P

聴かせてよ子どもの気持ち～震災について～

箕面市立豊川北小学校は、被災して校舎が使えなくなつた福島県いわき市立永崎小学校に2年続けてモザイク画を送りました。(詳しくは箕面市のホームページをご覧ください)

今年度、縦横2メートルを超える大作の制作に関わった4年生のうち10名のみなさんから、震災について考えたこと、感じていることを聴くことができました。

被災した人のためにしたこと?

- ・募金をした。
- ・お母さんと鉛筆や消しゴムなど学用品を送った。
- ・おばあちゃんたちに家族で野菜を送った。

地震や震災について知っていることは?

- ・原発事故で家にもどれない人がたくさんいる。
- ・仮設住宅が小さくて、夏は暑いし冬は寒くて大変そうだ。
- ・津波で流されたものが、外国に流れ着いた。
- ・校舎が壊れて避難している子がいる。

小学校に絵を贈ったことをどう思いますか?

- ・一生懸命作ったから絵は喜んでもらえたと思う。
- ・絵を送ったことで、小学生が元気になってくれたとしたら、いいことをしたなあと思う。

地震や災害について日頃気になっていること・考えたことは?

- ・前は、かわいそうだけども自分に関係ないと感じていた。今は気にしないといけないなと思う。
- ・自分の住んでいる団地も古いし階も上の方なので、不安に感じる。
- ・洪水とか土砂くずれみたいな災害も気になるようになった。



地震が起きた時の対応について家庭で話しましたか?

- ・家族が別の場所にいたら、逃げる場所も違ってくるし困るなあという話をした。
- ・学校から近いところにいたら学校に逃げる。家に近かつたら大阪大学に逃げると話した。
- ・うちの家は豊川北小学校より彩都西小学校の方が近い。近い場所に逃げた方が良いのではないかと話していました。

▼お話を聴いて 宮本美能(市民委員)▼

私は、豊川北小学校4年生の子どもたち一人ひとりが、東日本大震災の経験を自分のこととらえて、復興支援のために何かできることはなないか、そして、もし自分の地域で同じ災害が起つたらどのように避難するのかについて真剣に考えていることに驚くとともに、家族と具体的な話し合いをしている様子や、実際に行動に移していることに、感銘を受けました。絵に託された子どもたちの温かい心と思いまは、必ずいわき市立永崎小学校のお友だちに届いていることと思います。

今回は貴重なお話をたくさん聴かせていただき、本当にありがとうございました。

人権教育推進会議情報誌『はじける こころ』

発行 箕面市人権教育推進会議
箕面市教育委員会

人権教育課 TEL 072-724-6921 FAX 072-724-6010

e-mail : edujinken@maple.city.minoh.lg.jp

平成25年(2013年)1月

人権教育推進会議委員



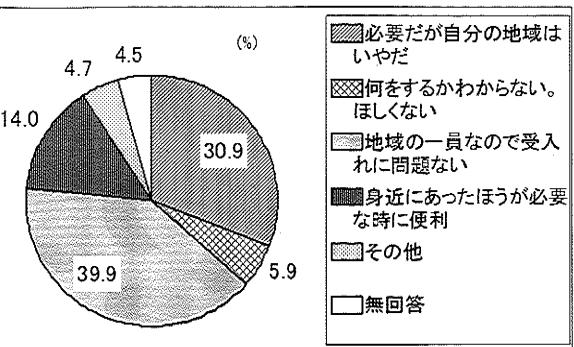
八木晃介、河野秀忠、宮本美能、永田千砂、松岡淑子、井原芳朗、安東由紀子、上田晃江、尾上和美、中野淳子、主原照昌、笠内房子、岸本ミヨネ、中西麻介、山北 智、森崎直幸
「はじけるこころ」は教職員・PTA運営委員に配布しています。また公共施設にもおいています。
公開ホームページ : <http://www.city.minoh.lg.jp/edujinken/jinken.html>

げんげのペえじ

みのおから世界へ!人権文化の花束!

「精神障害者との出会いを通して、『生きづらさ』を感じる人とは、支えるつながりとは」と題して、筆者(田中瑞穂)による「はじけるこころ」Vol.33が掲載されています。

この記事では、精神障害者との出会いや理解の重要性について語られています。また、精神障害者市民の社会復帰を促進するための施設の設置についての調査結果も紹介されています。



「精神障害者市民の社会復帰を促進するための
施設の設置について」

出展:『箕面市民人権意識調査報告書』H22(2010)

現在、多くの学校で車椅子体験、アイマスク体験や、視覚・聴覚障害者から体験談を聞くといった障害理解の取り組みがなされています。一方で、精神障害は学校現場で取り組まれることの少ない障害ではないでしょう。

箕面市立萱野北小学校の取り組み

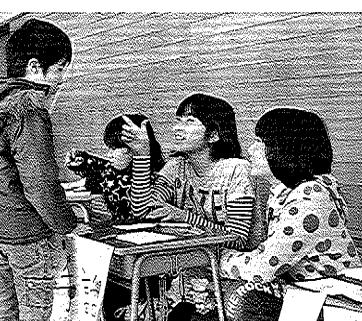
精神疾患により医療機関にかかる患者数は、近年大幅に増加しています。厚生労働省の発表によると平成20年度の患者数は約32万人で日本の人口のおよそ40人に一人。これを本市の人口にあてはめると、約3000人となります。

一般企業で働く人、社会福祉法人

息吹の運営する「シェスター」「あつとほーむ」などの福祉的就労の場で働く人もいますが、外出が難しいなど、社会的に孤立しているケースもあります。

精神障害者に対する偏見や忌避意識が明らかになりました。

今回、精神障害者が働く「もみじの家」にほど近い萱野北小学校で取り組まれた、精神障害の理解や当事者との交流を通し、人と人とのよい関係づくりを考える取り組みを取材しました。



校内イベント 手話コーナー

市民対象の意識調査(上グラフ)では、精神障害者に対する偏見や忌避意識が明らかになりました。今回、精神障害者が働く「もみじの家」にほど近い萱野北小学校で取り組まれた、精神障害の理解や当事者との交流を通し、人と人とのよい関係づくりを考える取り組みを取材しました。

最初の活動は「友だちの自転車の鍵を探し、帰宅が遅れる」といった場面をもとに、その時の気持ちを色紙で表現するというワークショップ。人それぞれに感じ方が違うことを知るとともに、感情そのものには良し悪しがないことを考えました。その後、体と同様に心も病気になるということを知り、当事者からうつ病の体験談を聞きました。2度目の活動では「もみじの家」で利用者とともにたわしづくり体験を行いました。

卒業後の生き方を考える総合的な学習の時間の中に、障害者との交流やワークショップを取り入れたのは6年生です。担当の安達先生・矢吹先生にねらいをお聞きすると、「取組を通して身近な地域で暮らす障害者のことを見るだけで、矢吹先生にねらいをお聞きすると、中学校で新しい仲間と出会う子どもたちに、友だちを気遣い、支えあう関係の大切さを気づかせることができますね」とのこと。

最終の活動では、それまでの活動を振り返り、施設コンフレクトの事例を交えながら、障害の有無に関する子どもたちが、一人の人として理解することができました。

内イベントを企画しました。6年生が考えたコーナー遊びを通して、全児童が障害のある人と交流し、理解を広めました。

精神障害者と出会う前の「こわい・身内じゃないと近寄れない・かわいそう」といったイメージが、たわしづくりの体験後は、「楽しそうだった・一般人とあまり変わらない・やさしい」といったイメージに大きく変化しました。

そして、3度目の活動として校内イベントを企画しました。6年生が考えたコーナー遊びを通して、全児童が障害のある人と交流し、理解を広めました。



(小学館2008)

当事者からのお話を

『おひだでませんように』 くすのきしげのり／作

石井聖岳／絵

司書さんのおすすめ本



主人公の男の子(小学1年生)は、毎日のようにトラブルを起こしては大人に怒られています。「違うんやー」と訴えたいけど、大好きな先生やお母さんの怒った顔を見ると、自分の気持ちを殺して黙ってしまう。本当は「いい子だね」と、みんなに言わたいのに…。

ある日、学校で七夕のお願いを短冊に書くことになりました。彼は、習いたてのひらがなで心を込めて「おこだでませんように」。少し間違えたけど、力いっぱい書かれた文字からは、

私が前へきて「ごめんなさい」と謝ってくれました。理由は、聞けませんで

したが、体験談を話した後、子どもたちが教室から引き上げる時に、私のグループの中の1人の子が踵を返して

心からそう願つていふことが伝わってきます。これを見た先生は、「ごめんね」と彼を抱きしめるのです。

今年「教室で読むのにいい絵本は知らないですか?」という先生からの問い合わせに、この作品を含め何冊か紹介したところ、後日こんなお話を聞きました。日頃周囲とトラブルを起こすことが多いA君は静かにお話を聞くことが苦手ですが、先生が絵本を読みはじめると、ぱつりと「これは俺や」と言つたそうです。絵本をきっかけに彼は自分自身を見つめ直しながらのかも?」と想像する時間が持ったかもしれません。

子どものだけでなく大人にとっても、周りの子どもへの接し方をぶりかえする機会を与えてくれるような、そんな1冊です。

大きな地震があつてね。神戸の街が
ボロボロに壊れたんだつて。おじいちゃん
といいねはあちやんのお家も倒れて、そ
の下敷きになつて、おじこねやん、おば
あねやこは、死んでやつたんだつて。今
は、神戸の街もきれひになつて、うれし
なひとが喜んでるけど、でも、たく
さん死んだひとたちが、帰つて来な

● がぬれちやつたよお。
ボクの弟は、車イスを使つてゐる。大き
な地震があつたとわ、ボクと弟とお母
さんは、家にじた。たまたまお父さん
も会社がお休みで、家にじたんだ。地
震がおそれてから、お父さんとか、

●ゆづわやんの意見。
わたしがまだ生まれていなかっただけで、神戸に住んでたおじいちゃんとおばあちゃんが死んだんですよ。なんで死んだのかってことを、お父さんか話してくれたよ。

てて、風が冷たしよ。その中で、子ど
もたちは元気、元気の田じ處をつか
つかしながら、列を作つて歩きてる。こつ
ものよへ學校へ行へんだね。その列
を見守るよひ、雲間かい、冬の太陽
の光が、キラキラと輝かれてる。

どうなるんだろ？…。

by
か
わ
の
ひ
で
た
い

「やがて、みんなで田舎車に乗つたやつ。」
「いいのかい、みんなで田舎車のと
そらく、妹の車イブを乗つて、ひど
外に田ると、家の前にある、堤防伝て
に、あの黒な波が来るのが見えたんだ。

- タケちゃんの氣持ち。
ボクの町には、原子力発電所がたくわんある。もし、福島県の原発事故のようないじが起されば、大変だ。子どもが一番やばかったよなあ。
- 大人は、十一歳でてんのかなあ。
- あなたは、地震を経験したことがある

- タケちゃんの気持ち。
「ボクの町」には、原子力発電所がたくさんある。もし、福島県の原発事故のやつになると起きれば、大変だよ。子どもが一番やばいんだよなあ。
- 大人は、十一戻してんのかなあ。
- あなたは、地震を経験したことがありますか。
- 地震に備えて、避難訓練をしたりとがありますか。
- 地震や津波、自然災害、原子力発電などについて、先生と一緒に話しあってみしゃべり。

「みんな自転車に乗つねやつ。」
「いいかい、みんなで自転車のと
りぬく、弟の車イスを押して行けりうと
外に田んど、家の前にある、堤防ほこ
に、あの大波が来るのが見えたんだ。
お母わざか、
「わの匂に呑わなづかい、家の匂は
逃がせんや。」
と、今閉めたばかりの玄関を開け
て、ボクたちをせあたてた。ボクはあ
わてて、弟の車イスを押して、家の中へ
駆け込んだよ。そして、お父さん、お母
さんが車イスをかついで、ボクが後ろ
から扶えて、ぐ踏ぐの脚踏をつっせりつ
しゃんと上がったよ。匂は、上がって、本
心として、お尻を見ぬく、おれていた。
やばかった。匂は外を見ると、近
じよだ、所の一階建ての家が流れしていくのが見
えた。ボクの家も、一階の天井まで水
が来たよ。

「みんな自転車に乗ります。」
「いいから、みんなで自転車のと
りわけ、弟の車イスを押して行こうと
外に出ると、家の前にある堤防伝い
に、あの黒い波が来るのが見えたんだ。
お母ねえが、
「わの間に合わないから、家の隣に
逃げよう。」
と、今閉めたばかりの玄関を開け
て、ボクたちをせきたいた。ボクはあ
わてて、弟の車イスを押して、家の中は
駆け込んだよ。そして、お父さん、お母
さんが車イスをかついで、ボクが後ろ
から支えて、2階への階段をワッセ、ワ
ッセヒュガつたよ。2階に上がり、木
シと木で、お尻を見るど、娘でたあ。
やバかたたあ。2階から外を見ると、近
所の1階建ての家が流れこむのが見
えた。ボクの家も、1階の天井まで水
が来たよ。

A black and white illustration showing a teacher standing in front of a group of children, holding a book and pointing upwards. The teacher is smiling and appears to be giving a lesson. The children are looking up at the teacher attentively.

「どうせやつてもできひん 興味ない」と簡単に口にする子どもたちを何とかしたいんです。」と熱く語るのは、子ども通貨「まいふる」の担当者、武田縁さん。他地域の人にも開かれた萱野地区のまちづくりの取り組みに魅かれ、大阪市内から通ううちに、気づいたらNPO職員になっていたという経験の持ち主です。

取り組みのねらいは、「子ども通貨」「まいふる」のやりとりを通して、子どもが地域の人とつながったり、新しいことにチャレンジしたり、自分の得意なこと、好きなことをみつけられること。そして、それを見守り支える大人を増やすことだそうです。

子どもたちは公園の草刈りチラシの挟み込み、月に一度の朝市での店番など、地域で提供される仕事や、らいどぴっくで行われる学習会で「まーぶ」を稼ぎます。

貯めた「まーぶ」でバスケット教室やサッカー教室、集団遊びプログラム「キッズパーク」の参加費を支払うことができる他、地域の祭りで金券としても使えます。さらに、預金通帳があり、たくさん貯めるとスタディーツアーへの参加も可能。「はっぴビジネス」で有名な徳島県上勝町を視察し、讃岐うどんを食べる第1回のツアーには2名の中学生が参加しました。

また、子どもたちが「まーぶ」をためて実現したい企画を発表するコンペを開催。長い流しそうめん、真剣にかくれんぼをするテレビ番組「逃走中」ごっこ、気球に乗るといったアイデアが入選

萱野地区では、「まーぶ」の兄貴分にあたる地域通貨「芝樂」を使った取り組みがなされました。「ありがとう」の気持ちの代りに渡す「芝樂」は大人も対象。助け合いが活性化する中で、気づかれることのなかつた地域の課題を明らかにする事例が多数報告されました。

この経験を生かし、18歳以下の子どもを対象にした「まーぶ」の取り組みを始めたのが昨年9月。この間、推計500名ほどの子どもが「まーぶ」を手にしています。

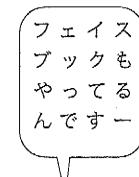
「まーぶ」の取り組みを支える地域の大人们たちは「こどもみらいサポーター」として会員登録をします。会費(一口2000円)を支払うことで資金面での支援を行うとともに、子どもたちに「まーぶ」を支払う使い道(仕事)を提供したり、「まーぶ」を使って参加でき

箕面の街は子育て熱心な方が多く、そのためのネットワーク力も強い、と子ども任せな子育てしか出来ていない私も実感している。

今回取材した萱野小学校区にある「らいどぴあ21」での活動もその一環。地域で活躍すると目に見える形で認めてもらえるシステムがある。自己肯定感の育ちを願い、子どもたちが主役となるよう、大人が熱心に取り組まれている。未来を担う子どもたちが地域で守る大人の背中からたくさん学びを得て欲しい。

・活動を取材して…

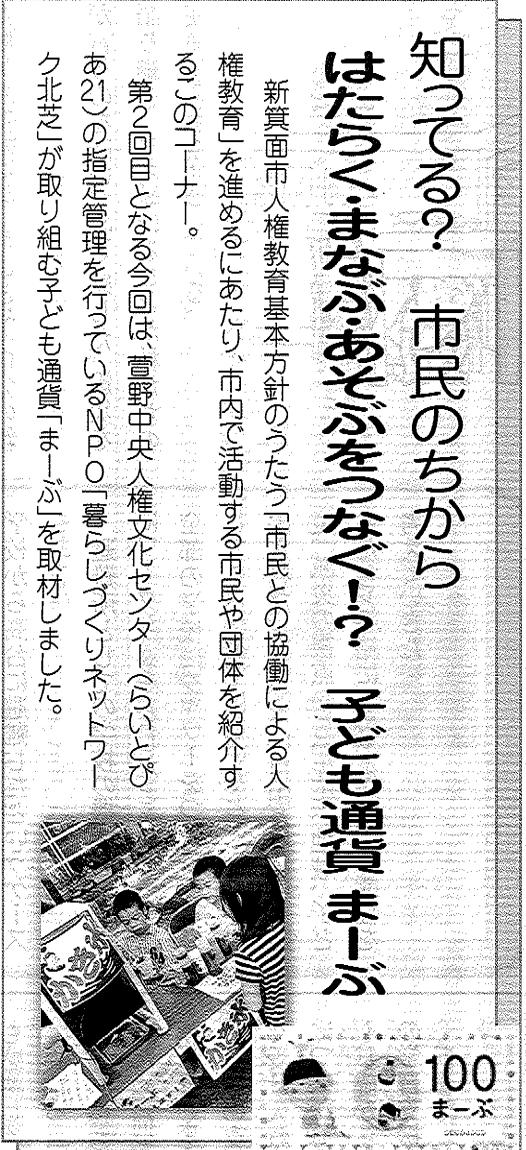
スも イク です
エッつ で
フブ やん



まーぶくん

活動を収め
て

A black and white illustration of a young boy with short hair, wearing a dark cap and a patterned shirt. He has a neutral expression. A speech bubble originates from his mouth, containing Japanese text.



しました。
「」のように、「まー
ぶ」を貯め、使うこと
で「はたらく・あそ
ぶ・まなぶ」という3
つ要素を一体のもの
として体験をするこ
とができます。

る活動を考えたりと運営面でのアイデアを出し合っています。(随時登録可能らいとぴあ21まで)

今後の展開について尋ねると、「まぶを使える場所を増やしたい。使える場所や用途が増えるほど、子どもが多様な体験をすることができ、多くの人が子どもの成長に関わることができ